

秋風吹胡霜。凋此簷下芳。秋風、胡霜を吹き、この簷下の芳を凋ましむ。

折芳怨歲晚。離別悽以傷。芳を折つて歲晚を怨み、離別、悽以て傷む。

謬攀青瑣賢。延我於此堂。謬つて青瑣の賢を攀ち、我を此堂に延く。

君爲長沙客。我獨之夜郎。君は長沙の客となり、我ひとり、夜郎に之く。

勸此一杯酒。豈惟道路長。この一杯の酒を勸む、豈に惟だ道路の長きのみならむや。

割珠兩分贈。寸心貴不忘。珠を割いて兩つながら分贈、寸心、忘れざるを貴ぶ。

何必兒女仁。相看淚成行。何ぞ必ずしも兒女の仁、相見て、涙、行を成す。

【字解】(一) 青瑣 劉昭の後漢書補宮閣簿に「青瑣門は、南宮に在り」とあり、衛瓘注吳郡賦に「青瑣は、月邊の青縷なり、一

に曰く、天子の門内に相格あり、再重青瑣するを瑣といふ」とあり、韋體太子の後漢書注に「青瑣は刻して瑣文を爲し、しかも、

青を以て之を飾るを謂ふなり」とあり、西京賦、青瑣丹墀、呂尚の註に「青瑣は窓なり、青を以て之を飾る」吳郡賦、青瑣丹墀、劉

涓林の註「瑣は月の内邊、青瑣を以て瑣文となす」呂延濟の註「青瑣は門窓欄刻して瑣文を爲し、染むるに青色を以てす」とある。

(二) 割珠 出處不詳。

【詩意】秋風冷に、胡天の霜を吹き來つて、この簷下の花を凋ましめた。芳を折らむとして、歳の既に晚きを怨み、今や別を爲すに際し、悽然として心を傷ましむるばかりである。われは、謬つて、青瑣門に出入する名賢の君と相知り、仍つて、君を訪へば、快く迎へて、北堂の奥深い處へ案内され

た。君は長沙に貶謫されて、此に居るのであるが、われは、獨り夜郎に行かねばならず、ここに、一杯の酒を勸め合ふのは、豈に唯だ道路長くして、この旅行が辛く、又何時逢へるといふ、そんな事の爲ばかりではない。君と我とは、珠を割いて、互に相贈るといふ程に、極めて深い交際で、方寸の心相忘れざるを貴ぶ次第、何も、區區たる兒女の仁の爲ではないが、ここに別を爲すに際して、涙が自然に流れ出て行を爲す程である。

【餘論】この詩は、純ら今次の別離に就いて述べたので、連作の體、宜しく然るべく、兩首相得て、殆んど餘蘊なきを覺えるのである。乾隆御批には兩首を併せ評して「比喻に深し、乃ち騷人の遺音、その音哀婉。情景正に合ふ」といつてあるが、簡にして要を得、さすがに、その眼孔の高きを見るべきものである。

渡荆門送別

荆門を渡りて別を送る

渡遠荆門外。來從楚國遊。渡は遠し荆門の外、來つて楚國より遊ぶ。

山隨平野盡。江入大荒流。山は平野に隨つて盡き、江は大荒に入つて流る。

月下飛天鏡。雲生結海樓。月は下つて天鏡を飛ばし、雲は生じて海樓を結ぶ。

仍連故鄉水。萬里送行舟。仍ほ故郷の水に連り、萬里、行舟を送る。

【字解】 一 山隨平野盡 山は蜀地の山で、楊齊賢の解に「荆門軍、山あり、荆門と名づく、蜀の諸山、ここに至つて復た見えず」とある。二 雲生結海樓 これは盤氣樓を云つたので、史記に「海旁の樓氣、樓臺に象る」といひ、國史補に「海上の居人、時に飛樓を見る、結構の状の如し、甚だ壯麗」とある。

【題義】 通典に「荆門山は、後漢の岑彭、田戎を此に破り、公孫述、又將任滿を遣して、吳漢を拒ぎ、浮橋を作る處、今の峽州宜都縣西北五十里に在り」といひ、水經に「江水、楚の荆門虎牙の間を束ぬ。荆門山は南に在り、上合して下開くこと門の若し、虎牙山は、北に在り、石壁、江間に危く、白文あり、牙に類す、故に以て名と爲す。荆門虎牙の二山は、即ち楚の西塞」とある。この詩は、李白が夜郎に行く途すがら、荆門を渡つて、宜都、即ち今の宜昌に至り、そして、故郷の蜀から東に向つて行く人を送つたのである。

【詩意】 荆門山外、渡し場は遠くして、江水を渡るのは、容易な事ではなく、おまけに、予は、遙に楚國から此に來たのである。顧みて、眺めやれば、蜀山、すでに盡きて、平野、東南に開き、江水渺渺、大空に接して流れる。月の落つるは、さながら天の鏡を飛ばすが如く、雲生すれば、海上、俄に暗くして、壓氣が湧いて起る。これより、君は、東行されるが、故郷の水に連る此江に、行舟を送られて、萬里の遠くに行かねばならぬ。

【餘論】 山隨平野盡の二句は、さすがに名聯である。丁龍友は「胡元瑞、謂ふ、山隨平野盡、江入大荒流、これ太白の壯語なり。子美の詩、星隨平野濶、月湧大江流、二語、骨力これに過ぐ、と。予謂ふ、李は是れ晝景、杜は是れ夜景、李は是れ行舟暫視、杜は是れ停舟細觀、未だ榮論すべからず」といひ、乾隆御批にも亦た「項聯、杜甫の星垂平野濶、月湧大江流と句法相類し、亦た氣勢均敵す、胡震亨、杜を以て勝れりと爲す、亦た故らに低昂を爲すのみ」といつて居る。但し、ここに胡震亨とあるは、胡元瑞の誤であらう。

聞李太尉大舉秦兵百萬出征東南懦夫請纓冀
申一割之用半道病還留別金陵崔侍御十九韻

李太尉、秦兵百萬を大舉して、出でて東南を征せむとするを聞き、懦夫、纓を請ひ、一割の用を申べむと冀ひしに、半道にして病みて還り、金陵の崔侍御に留別す。十九韻

秦出天下兵。蹴踏燕趙傾。秦は天下の兵を出し、蹴踏して、燕趙傾く。
黃河飲馬竭。赤羽連天明。黃河、馬に飲うて竭き、赤羽、天に連つて明かなり。
太尉仗旄鉞。雲騎繞彭城。太尉、旄鉞に仗り、雲騎、彭城を繞る。
三軍受號令。千里肅雷霆。三軍、號令を受け、千里、雷霆肅たり。

函谷絶飛鳥。武關擁連營。
 意在斬巨鼉。何論鱸長鯨。
 恨無左車略。多愧魯連生。
 拂劍照嚴霜。彫戈鬢胡纓。
 願雪會稽恥。將期報恩榮。
 半道謝病還。無因東南征。
 亞夫未見顧。劇孟阻先行。
 天奪壯士心。長吁別吳京。
 金陵遇太守。倒屣相逢迎。
 羣公咸祖餞。四座羅朝英。
 初發臨滄觀。醉棲征虜亭。
 舊國見秋月。長江流寒聲。
 帝車信廻轉。河漢復縱橫。

函谷、飛鳥を絶ち、武關、連營を擁す。
 意、巨鼉を斬るに在り、何ぞ長鯨を鱸にするを論せむ。
 恨むらくは、左車の略なく、多く愧づ魯連生。
 劍を拂うて嚴霜を照らし、彫戈、鬢胡の纓。
 願くは、會稽の恥を雪ぎ、將に恩榮に報ゆるを期せむとす。
 半道、病を謝して還り、東南に征するに因なし。
 亞夫、未だ顧みられず、劇孟、先行を阻む。
 天は、壯士の心を奪ひ、長吁して、吳京に別る。
 金陵に太守に遇ふ、屣を倒にして相逢迎。
 羣公咸な祖餞、四座、朝英を羅ぬ。
 初め臨滄觀を發し、酔うて棲む征虜亭。
 舊國、秋月を見、長江、寒聲を流す。
 帝車、信に廻轉、河漢、復た縱橫。

孤鳳向西海。飛鴻辭北溟。
 因之出寥廓。揮手謝公卿。

孤鳳、西海に向ひ、飛鴻、北溟を辭す。
 これに因つて、寥廓を出で、手を揮つて、公卿に謝す。

【字解】「一」赤羽。家語に「由、願はくは、白羽、月の若く、赤羽、日の若きを得む」とある。赤羽は指物の一種と見える。
 【二】阮。史記に「師尙父、左に黃鉞を杖つき、右に白旄を把り、以て誓ふ」とある。【三】雲騎。騎兵の多きこと雲の如きをいふ。
 【四】彭城。即ち徐州、河南道に隸す。【五】三軍受命。舊唐書に「李光弼、太尉に拜せられ、河南淮南山東道劉南等副元帥に充てられ、侍中、故の如し、出でて、臨滄を領す。史朝義、岵山の勝に乗じ、申光等十三州に寇し、自ら精騎を領し、李峯を宋州に圍む。將士皆懼れ、南、揚州を保たむことを請ふ。光弼、徑に徐州に赴き、以て之を領し、田神功を遣し、擊つて之を敗る。浙東の賊首真鳳、鄞縣を攻め、浙東大に亂る。光弼、兵を分つて除討し、江左を剋定し、人心乃ち安し。光弼の未だ河南に至らざるや、田神功、劉展を平らげ、後、揚府に逗留す。尙書、殷仲卿、兗鄆に相攻め、來瑛、襄陽に叛す。朝廷、これを患ふ。光弼の經騎、徐州に至るに及び、史朝義、退き走り、神功、遂に河南に歸る。尙書、殷仲卿、來瑛、皆威名を懼れ、相繼いで、闕に赴く」とあり、又「光弼軍を御すること嚴肅、天下、その威令に服す、號令を申ぶる毎に、諸將敢て仰き視す」とある。【六】函谷。關名、元和郡縣志に「函谷の故城は陝州靈寶縣南十里に在り、秦の函關城は、漢の弘農縣なり」とある。【七】武關。太平寰宇記に「武關は、商州商洛縣の東南九十里に在り」とある。【八】左車略。史記に「趙王、成安君陳餘、漢の且に襲はむとするを聞くと、兵を井陘口に聚め、號して二十萬と稱す。廣武君李左車、成安君に説いて曰く、願はくは、足下、臣に奇兵三萬人を假せ、間路より其輜重を絶たむ。足下、溝を深くし、壘を高し、營を堅し、與に戦ふ勿れ、二十日に至らずして、兩將の頭、戲下に致すべし」と。成安君、聽かず。韓信、兵を引いて、井陘口を出で、成安君を涿水の上に斬り、趙王歇を禽にす。信、乃ち軍中に令して、廣武君を殺すなからしめ、能く生得するものあらば、千金に購はむ」と。ここに於て、廣武君を縛して戲下に致すものあり、信、乃ち其縛を解き、東郷して坐し、西郷して對し、これに師事す」とある。【九】魯連。前に見ゆ。【一〇】彫戈。鏃刺を施せる戟。【一一】雲胡纓。莊子の説劍に「垂冠綬

胡の標」とあつて、司馬彪の註に「樓胡の標とは、粗糲、文理なきを謂ふなり」とある。【三】會稽、亞夫、劇孟、皆前に見ゆ。【二】吳京、建康、即ち金陵、今の南京。【四】倒屣、十六國春秋に「宋懸、儒士の門に在るを聞く毎に、常に屣を倒にして出でて迎へ、政事を停殿し、經籍を引談す」とある。【五】祖錢、漢書に「丞相、祖道を爲す」とあつて、顏師古の註に「祖は、送行の際、因つて宴飲す」とあり、左傳に「鄭の六廟、宣子を郊に饒す」とあつて、杜預の註に「饒は行を送つて酒を飲むなり」とある。【六】臨滄觀、太平寰宇記に「臨滄觀は、勞勞山上に在り、亭七間あり、名づけて新亭といふ。吳の築くところ、宋、改めて、臨滄觀と爲す。周顛、王導等と春日に當り、これに登つて會宴す。凱曰く、風景殊ならざるも、目を擧ぐれば、江山の異ありと。即ち此處なり、これを勞勞亭といふ、古しへ送別の所」とある。【七】征虜亭、丹陽記に「征虜亭は、太安中、征虜將軍謝石、この亭を立つ、因つて以て名となす」とあり、胡三省の通鑑註に「征虜亭は、方山の南に在り、元武廟頭の大略より北出し、征虜亭に至る」とある。【八】帝車、史記に「斗を帝車となす、中央に運し、四方に臨置す」とあり、晉書に「斗を帝車となす、運動の機に取るなり」とある。【九】河漢、天漢に同じ、天の河。【一〇】夢廓、天上寛厚の處。

【題義】通鑑に「上元二年五月、李光弼を以て、河南副元帥太尉兼侍中都統河南淮南東西山南東荆南江南西浙江東西八道行營節度使と爲し、出でて、臨淮に鎮す」とある。請纓とは、漢書に「終軍を遣して、南越に使用して其王に説かしめ、入朝して内諸侯に比せしめむと欲す。軍、自ら請ひ、願はくは長纓を受け、必ず南越王を羈して、これを闕下に致さむ」と。軍、遂に往いて越王に説く、越王、聽許し、國を擧げて内屬せむことを請ふ」とある。一割之用とは、後漢書に「班超曰く、むかし、魏絳は列國の大夫にして、尙ほ能く諸戎を和輯す、況んや、臣、大漢の威を奉ず、しかも、鉛刀一割の用なからむや」とある。太尉李光弼が關中の士卒百萬を擧げて東南を征せむとするに際し、李白は、むか

しの終軍が、纓を請うて、南越王を繫がむといへるが如く、命を奉じて、出でて使し、せめては鉛刀一割の用に供したいといふので、金陵から態態北上した處が、途中に病氣に成つた爲に、止むを得ず引きかへした。かくて、後日、金陵の崔宗之に留別する意味で、この詩を補作したので、十九韻は、隔句に韻を踏むから、全篇が三十八句に成る譯である。

【詩意】古しへの秦たる關中の地より、天下の精兵を出し、賊の根據地たる燕趙を蹴倒して傾けて仕舞ひ、黄河の流は、馬に飲ふ爲に乾上り、指物の赤羽は、天に連つて明かで、官軍の勢は、まことに素張らしいものである。ここに、太尉李光弼は、白旄黄鉞を手にして指揮し、雲の如き騎兵は彭城を圍繞した。三軍の兵士は、謹んで其號令を受け、千里の間、靜まりかへつて、唯だ雷霆の響を聞くばかり、かくて、函谷には、飛鳥の影だになく、武關には、兵營を連ねて、軍威頓に揚がり、その意は、巨鼉に比すべき賊首を斬らむとするので、長鯨を切りさいなんで、膾にする位の事は、何でもない。ここに、われ李白は、遺憾ながら、李左車の才略なく、その氣節も、亦た魯仲連に愧づる位であるが、劍を拂へば、嚴霜を照らすべく、彫戈を擁して、飾なき冠纓を結び、天晴凜凜しき打扮で、國家の爲に會稽の恥を雪がんとし、又從來天子より賜はりし恩榮に報いむことを心に誓つた。かくて、折角出かけた處が、途中で病氣になり、止むを得ずして引きかへし、まだ東南まで往くことが出来なかつた。たとへば、劇孟が、行く先を妨げられ、その爲に、周亞夫にも顧みられなかつた様な次第、

天は壯士の心に背き、風志空しく翮翮したから、長嘆して、金陵に別れたことを追憶するの情に堪へぬ。その時、金陵に於ては、太守の崔君に遇つた處が、久しい以前から交誼ありしに因り、屍を倒に穿つて、忙はしく出て迎へ、やがて、筵席に案内せられ、羣公が盡く集まつて、我が行を饒せられ、座上には在朝の英才を網羅した位で、自分に取つては、まことに一生の面目である。そこで、初には、臨滄觀を發し、酔うて、征虜亭に留まり、折から、秋の月、隈もなく舊國を照らすを見、長江の水が寒げなる聲をして流るるを聞き、俯仰の餘、さすがに、感慨に堪へなかつた。帝車の稱ある北斗は、絶えず廻轉し、天の河も縦横に其位置を變じ、天象を見ても、まさしく秋の最中、そこで孤鳳が西海に去り、飛鴻が北溟を辭し、ともに天上、寬廣の處に向ふと同じく、われも亦た手を揮つて公卿に挨拶し、まことに、千載の一時だといふので、征途に上つたのであつたが、上記の始末で、空しく引き返したのは、まことに遺憾至極の事であつた。

【餘論】この詩は、病を得て歸りし後、當日送別の事を追憶して作つたので、起首より何論論長鯨一に至るまでが、李光弼の兵を出した顛末、恨無左車路より長吁別吳京一に至るまでが、今次の北行、井に引返して來たことの次第。それより以下が、前日送別の状況である。これに因つて見ると、李白は、永王璣の叛後、その身を清めむが爲に、李光弼の軍に投せむとしたので、これは其傳にも見えず、従つて、この詩は、彼の經歷を調べる上に於て、極めて貴重なる一資料である。

別韋少府

韋少府に別る

西出蒼龍門南登白鹿原。

西、蒼龍門を出で、南、白鹿原に登る。

欲尋商山皓猶戀漢皇恩。

商山の皓を尋ねむと欲し、猶ほ漢皇の恩を戀ふ。

水國遠行邁仙經深討論。

水國、遠く行邁、仙經、深く討論。

洗心句溪月清耳敬亭猿。

心を洗ふ句溪の月、耳を清ます敬亭の猿。

築室在人境閉關無世喧。

室を築いて人境に在り、關を閉ちて世喧なし。

多君枉高駕贈我以微言。

多とす、君が高駕を枉げ、我に贈るに微言を以てするを。

交乃意氣合道因風雅存。

交は乃ち意氣合し、道は風雅に因つて存す。

別離有相思瑤瑟與金樽。

別離、相思あり、瑤瑟と金樽と。

【字解】一、蒼龍門、史記集解に「關中記に曰く、東に蒼龍闕あり、北に玄武闕あり」といひ、吳均の詩に「已葺蒼龍門」とある。

二、白鹿原、元和郡縣志に「白鹿原は、京兆府萬年縣東二十里に在り、亦た之を灞上といふ。漢の文帝、その上に葬る、これを灞陵」といふ。王仲宣の詩に曰く、南登灞陵原、回首望長安」と、即ち此なり」とある。

三、商山皓、前に見ゆ。

四、句溪、江南通志に「句溪は、寧國府城の東五里に在り、溪流廻曲、形、句字の如し、源は龍巖天目の諸山に出で、東北に流ること二百餘里、衆流を合して江に入る、李白の詩、洗心句溪月、蓋し其清を謂ふなり」とある。

五、敬亭、前に見ゆ。

六、多、重んずる。

七、微言、漢書に「仲尼没して微言絶ゆ」とある。

【題義】この詩は、韋少府に別れる時、賦して贈つたのであるが、少府は如何なる人か、一切分からぬ。

【詩意】さきに長安に在りし時、西、蒼龍門を出で、南、白鹿原に登り、商山の四皓を尋ねむと欲せしが、なほ漢家の恩を戀ひ慕うて、さう容易に此世を思ひ切ること出来なかつた。それから、放逐せられし後は、遠く南方の水國に往き、仙經を精細に討論し、句溪の水の清きに向つて心を洗ひ、敬亭の山に啼く猿の聲を聞いて、耳を清まし、そして、居室を人境に築きしものから、門を閉ぢて、世上の喧しきことを一切聞かんだ。しかるに、君は態態鶴を枉げて來訪せられ、特に至道の要を得たる微言を以て子に贈られ、意氣、自然に合ふ處から、交を結び、又風雅に因つて、わが道は、長く存して居た。ここに別離を爲すに際し、相思の念を去ること能はず、せめては、瑤琴と金樽とに因つて、一夕の興を繼にしたいと思ふのである。

【餘論】この詩は、五言排律で、大體、平淺ではあるが、意旨明白にして、少しも掩蔽するところなく、韋少府の人物も、これに因つて略ぼ想像される。

南陵別兒童入京

南陵にて兒童に別れて京に入る

白酒新熟山中歸、白酒、新に熟して山中に歸る。

【字解】白酒、濁酒に同じ。

黃雞啄黍秋正肥。

黃雞、黍を啄んで秋正に肥えたり。

呼童烹雞酌白酒。

童を呼び、雞を烹て、白酒を酌む。

兒女嬉笑牽人衣。

兒女嬉笑して、人衣を牽く。

高歌取醉欲自慰。

高歌、醉を取つて、自ら慰めむと欲す。

起舞落日爭光輝。

起つて舞へば、落日、光輝を争ふ。

遊說萬乘苦不早。

萬乘に遊說する、早からざるに苦む。

著鞭跨馬涉遠道。

鞭を著け、馬に跨つて、遠道を渉る。

會稽愚婦輕買臣。

會稽の愚婦、買臣を輕んず。

余亦辭家西入秦。

余亦た家を辭して西秦に入る。

仰天大笑出門去。

天を仰いで大笑、門を出でて去る。

我輩豈是蓬蒿人。

我輩豈に是れ蓬蒿の人。

三輔決錄に「張仲蔚、身を隱して仕へず、居るところ、蓬蒿、人を没す」とある。

【題義】一本には、題を南陵別兒童入京に作り、又註に「一に古意に作る」ともある。つまり、南陵を發し

【一】買臣、漢書に、朱買臣、家貧にして、好んで書を讀み、産業を治めず、常に薪樵を刈り、賣つて以て食を給し、束薪を擔ひ、行く、且つ書を誦す、その妻、亦た負擔して相隨ひ、數ば買臣を止め、道中に歌謡することなからしむ。買臣、愈々益す疾歎す。妻、これを羞ぢて、去らむことを求む。買臣笑つて曰く、われ年五十、當に富貴なるべし。今、すでに四十餘、汝、苦むこと日久し、わが富貴にして、汝の功に報ゆるを得てと。妻、患怒して曰く、公等の如きは、終に溝中に餓死せむのみ、何ぞ能く富貴ならむや、と。買臣、留むる能はず、即ち去るを聽るす」とある。【二】秦、長安。【三】蓬蒿、

て、長安に向はむとするに際し、別を兒童等に敍して作つたのである。

【詩意】山中なる我が家に歸れば、濁酒方に熟し、雞は落穂を啄み、折しも秋で、ひどく肥え太つて居る。そこで、童を呼んで、雞を料理せしめ、そして、濁酒を酌めば、兒女は、喜んで、我が衣を牽き留め、いつまでも此に居よといふ。かくて酔うては、高歌して自ら慰めむとし、やがて起舞すれば、落日と光輝を争ふ様である。抑も、萬乘の天子に遊説し、三寸の舌を以て卿相の位を取るは、何でもないが善いので、それが爲には、鞭を揮ひ、馬に跨つて、長い旅路を越えて行かねばならぬ。むかし、會稽の愚婦は、朱買臣を馬鹿にして、離婚を求めたが、買臣は、後で大さう出身した。われも亦た今家を辭して、西の方、長安に向はむとし、將來の成功を豫期しつつ、天を仰いで大笑して出かける。元來、我輩は、天縱の才略を抱いて居るもので、決して、蓬蒿の中に埋れて居るべき人物ではなく、今次の行、もとより徒爾ならず、爾等も、その積りで、わが榮達の日を屈指して待ちつつ、心のどかに留守をして居るが善い。

【餘論】一篇の本意は、結二句に在るので、乾隆御批にも「結句、直致を以て風格を見る、謂はゆる辭意ともに盡きて、奔馬を截るが如し」とある。それから劉須溪は「草草一語、傾倒至り盡す、起四句、還山の樂を説き得て、磊落、辛苦せず、しかも情實暢然、道ふに勝ふべからず」といつて居る。

別山僧

山僧に別る

何處名僧到水西。何處の名僧か、水西に到り、

乘舟弄月宿涇溪。舟に乗じ、月を弄して、涇溪に宿す。

平明別我上山去。平明、我に別れて、山に上つて去り、

手攜金策踏雲梯。手に金策を攜へて、雲梯を踏む。

騰身轉覺三天近。身を騰らせて、轉た覺ゆ三天の近きを。

舉足廻看萬嶺低。足を舉げて廻看すれば、萬嶺低し。

諠浪肯居支遁下。諠浪、肯て支遁の下に居らむや。

風流還與遠公齊。風流還た遠公と齊し。

此度別離何日見。この度別離、何の日か見む。

相思一夜暝猿啼。相思一夜、暝猿啼く。

【字解】(一) 水西 江南通志に

「水西山は、寧國府涇縣の西五里に在り、林壑遼密、下、涇溪に臨み、

舊と寶勝、崇慶、白雲の三寺を建つ。浮屠對峙、樓閣參差、碧水烟を浮べ、

咫尺萬狀、晉の葛洪、劉道民、唐の李白、杜牧之、皆常に此に遊戯す。

寶勝寺は即ち水西寺、白雲寺は即ち水西首寺、崇慶寺は即ち天宮水西寺

なり。涇溪は、涇縣の西南一里に在り、下流、蕪湖に至つて、江に入る」とある。(二) 金策 錫杖。(三)

雲梯 山中の磴道、これに梯して上り、雲中に入るが如きなす。(四)

支遁 法苑珠林に「沙門支遁、字は道林、陳留の人なり、神宇偉資、老

釋風流の宗たり」とある。(五) 遠公 神僧傳に「釋慧遠、本姓は賈氏、雁門樓煩の人なり、少にして諸生となり、六經を博綜し、

尤も老莊に善し。性度弘偉、風塵朗拔、宿儒英達と雖も、その深致に服せざるなし。後、沙門釋道安が波若經を講するを聞いて、驚然として悟り、誓を投じ、髮を落し、命を委し、衆を受く。すでに道に入り、厲然不羣、常に綱維を總攝せむと欲し、大法を以て己

の任と爲す」とある。【六】 嘆猿 闇夜に啼く猿。

【題義】 別れた其人は、山僧といふだけで、何といふ名か、一切分らぬ。

【詩意】 何處に住んで居る名僧か知らぬが、水西寺に來りしに因り、一所に舟に乗じ、月を弄び、夜もすがら、涇溪に宿して居た。かくて夜あけになると、われに別れて、山に登つて去り、手に錫杖を執り、雲梯の如き磴道を踏んで往つたが、身を跳らせば、三天の近きを覺ゆべく、足を擧ぐれば、萬壑の低きを見るべく、恰も天地の中間に居るやうなもので、その危険も、亦た甚しい。この僧の戯れふざけることは、支公の下に在らざるべく、その風流は、慧遠と同じである。この度、ここに別れた上は、何日また逢へることやら、かくて、相思の情自ら堪へず、かくて、夜もすがら猿の聲の悲しきを聞いて、愈よ斷腸の想を増した。

【餘論】 この詩は十句で、七言排律の體を爲しては居るが、第三第四の兩句が對偶を爲して居らぬ。唐詩品彙に「七言排律、唐人多く見ず、太白の別山僧、高適の宿田家、等の作の如き、聯對精密と雖も、しかも、律調未だ純ならず、終に是れ古詩の體段」とあつて、如何にも、其通りである。

贈別王山人歸布山

王山人の布山に歸るに贈別す

王子析道論、微言破秋毫。

王子、道を析して論じ、微言、秋毫を破る

還歸布山隱、興入天雲高。

還た歸つて布山に隱れ、興は天雲に入つて高し。

爾去安可遲、瑤草恐衰歇。

爾去る、安んぞ遅かるべけむや、瑤草、衰歇を恐る。

我心亦懷歸、屢夢松上月。

我が心、亦た歸るを懷ひ、屢ば夢む松上の月。

傲然遂獨往、長嘯開巖扉。

傲然として、遂に獨往、長嘯、巖扉を開く。

林壑久已蕪、石道生薔薇。

林壑、久しく已に蕪し、石道、薔薇を生ず。

願言弄笙鶴、歲晚來相依。

願はくは言に笙鶴を弄せよ、歲晚、來つて相依らむ。

【字解】 【一】 破秋毫 三國志の註に「管輅別傳に曰く、何尙書、神明精微、言皆巧妙、巧妙の至、殆んど秋毫を破る」とあり、孫綽の太尉庚亮碑に「微言、秋毫に散じ、玄風、鐘音に響ぶ」とある。微妙の言辭が極めて細かい處まで行き互るといふ體。

【題義】 この詩は、王山人が布山に歸る時、別に際して贈つたのである。しかし、王山人の閱歷等は分らない。

【詩意】 王山人が宇宙の本體たる道を解析して論ずるを聞けば、いかにも微妙で、極めて細かい處まで行き互り、さすがに、その修養の深いことが分かる。君は、今、ここより還つて、布山に隱れむとし、歸興は、高く天上の雲に入るばかり。汝、去ること、決して遅かるべからず、今しも秋で、瑤草は衰歇せむとして居る。われも、客土に飄零すること既に久しく、仍つて、歸るを懷うて、夢に故山

留別 贈別王山人歸布山

の松に懸れる月の景色を見る程である。君は、傲然獨り往いて、長嘯し、舊居の巖扉を開いて、その中に住まはれるであらう。しかし、久しい間、誰も居なかつた爲に、林壑も荒れはてて仕舞ひ、石かどかどしき細道には、野薔薇が生ひ茂つて、往來も六つかしい程であらう。君は此に在つて、笙を吹き、鶴を伴うて、心のどかに浮世の事を忘れて居れば善いので、われも亦た晩年に成つたらば、世事を謝して、そこへ往つて、君と一所に住むことに致さう。

【餘論】王山人の人物は、起首四句に盡きて居る。それから、我心亦懷歸の二句は、突出に類するが、結二句の針線となつて居て、結構を緊密にし、且つ平板の弊に陥らぬ様にしたものである。

江夏別宋之悌

江夏にて宋之悌に別る

楚水清若空。遙將碧海通。

楚水清きこと空の若く、遙に碧海と通す。

人分千里外。興在一杯中。

人は分つ千里の外、興は一杯の中に在り。

谷鳥吟晴日。江猿嘯晚風。

谷鳥、晴日に吟じ、江猿、晚風に嘯く。

平生不下淚。於此泣無窮。

平生、涙を下さず、此に於て、泣くこと窮まりなし。

【字解】「一」清若空、劉楨の詩に「煙峰時如畫、寒水清若空」とあり、陸放翁の入蜀記に「蜀州より以南を漢水となす、水色澄

澈、鑑すべし、太白云ふ、楚水清若空と、蓋し此を言ふなり」とある。

【題義】これは、江夏に於て、宋之悌に別れる時に作つたのである。

【詩意】漢水は、澄み切つて、その色は、青天と一般、しかも、大江に入つて、遙に碧海と通じて居る。今や、われ等兩人、故郷を去る千里の外に在つて、將に相別れむとし、一杯を傾け、強ひて興を縦にして居る。さきには、谷を出た鳥が晴日に歌つて居たが、やがて、黄昏ならむとすれば、江邊の樹樹に栖む猿は、晚風に嘯いて居る。われは、剛健以て性と爲し、平生涙を落したことはないが、今日は、この地、この景に對し、とめどなく涙の下るを禁じ得ない。

【餘論】胡震亨は「項聯、達夫の功名萬里外、心事一杯中と、皆庾抱之の悲生萬里外、恨在一杯中より來る。而して、達夫は較や厚く、太白は較や逸、並に未だ軒輕し易からず」といひ、胡應麟は「高は渾厚と雖も到り易し、李は超逸、神に入る」といひ、乾隆御批には「高きに登つて呼ぶ、衆山皆響く」とある。

終